《黄色と金色のハーモニー：バタフライ・キャビネット》（ハンテリアン・アート・ギャラリー所蔵）について

京都大学　門田 園子

建築家 E・W・ゴッドウィンが制作し、画家 J・M・ホイッスラーが装飾した《黄色と金色のハーモニー》はマホガニー製キャビネット（もとはマントルピースとして使用）で、1878 年のパリ万国博覧会に出品された。ゴッドウィンとホイッスラーは日本の美術工芸品を 1850 年代後半から収集していたジャポニスム愛好者であった。キャビネットのシンプルな横木や障子を思わせる隅棚、孔雀の羽根、蝶、花弁をモチーフとしたホイッスラーの金箔押しの装飾と色彩、上棚にリバティ所蔵の加賀の陶磁器が陳列されていたということからも、この作品には二人のジャポニスムへの関心が現れていると指摘されてきた。

本論では《黄色と金色のハーモニー》がジャポニスムの特徴を備えながらも、古典様式のリヴァイヴァルとアーツ＆クラフツ運動の影響がみられる作品であることを以下の二点から考察する。第一に、キャビネットの天板、柱頭、破風に古典様式が用いられている点に注目する。1870 年代の英国では十八世紀の様式のリヴァイヴァルが起こる中、マホガニー材を多用したチッペンデール式や簡素なネオ・クラシックに再び注目が集まっていた。従来作品に見られるシンプリシティは、日本美術の空間把握を利用したものであると論じられてきたが、ゴッドウィンは十八世紀の様式に対しても、シンプリシティを見出している。また、1860 年代後半以降 1870 年代にかけてのホイッスラーの画風には、ギリシアと日本の混淆がみられる。「ハーモニー」と題された本作品には、唯美主義者ホイッスラーの総合芸術への志向が表現されており、古代ギリシアと日本の芸術は美の名の下に結びつくものであった。

第二点は、家具に絵画的な塗装を施す行為に着目する。1870 年代には「純粋芸術」と「応用芸術」を結びつけた「芸術家具」という新たな呼び名の家具が流行した。絵画的な塗装は「芸術家具」の特徴の一つであり、「生活の中に芸術を」というアーツ＆クラフツ運動の思考を反映している。これまでの研究では中世復古主義の立場から、自然に形態を見出し、装飾豊かな表現を擁護するラスキン-モリスの思想は、形態が先立ち抽象性の目立つホイッスラー-ゴッドウィンの唯美主義と相反するものであると対立を強調する論調が多い。これは二十世紀初頭に H・ムテジウスがゴッドウィンを取り上げて以降、モダニズムの文脈でゴッドウィンが捉えられてきたことにも関わっている。しかし、本来ゴッドウィンはゴシック・リヴァイヴァリストとして創作活動をはじめており、様式を自由に選択し続けた。《黄色と金色のハーモニー》が置かれる予定であった部屋には、《四季》と名づけられた中世風の衣装をまとう人物パネルがついたキャビネットも配置されていた。ホイッスラーとゴッドウィンの室内装飾には、様式の自由な選択と折衷の上に成り立つ全体としての調和がみられるのである。